

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第210号（2025年7月夏号）

常世の風に吹かれて呟いて（15） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2016年）の記事から

一部を抜粋して連載します。）

・夕暮れが暑さを連れてやって来た 風もなく

昼間は昨日に続いて、涼しく快適であったが、夕方からジワジワ気温が上がり、不快指数急上昇となった。お犬様は、不快指数が上昇するに合わせ、息遣いが荒くなる。暑ければ机の下から出れば良いものをそれをしない。片時も傍から離れたくないというのは、可愛いものではあるが、煩わしさもそれと同じくらいある。

梅の木村の雀達が、最近少し増えたように見え、今日はじっくり観察しながら数を数えてみた。

梅の木に止まってお喋りをしている雀は、平均すると凡そ13羽であった。最初は、6〜7羽であったのだから、その倍になれば賑やかさも倍になったと云う訳だ。これ以上増えないようにしたいが、さてどうした良いものだろうか。しかし、お犬お猫の3sと同じように、餌撒きの時間が来ると必ず梅の木に戻って来て、待つているのを見ると家族が増えたように見え、愛しくなる。

・梅の木に雀等 雨まつらば陽まつらば

これまで朝と夕方しか梅の木にいなかった雀等、今は一日中梅の木に寛いでいる。たまに何処かへ飛び立っていくが、30〜40分

すると帰ってくる。異様なほどに葉の密集した梅の木なので、雨宿りは勿論、強い陽射しも遮ってくれる。今ではすっかり自分たちの我が家になっている。充分とは言えないが朝夕餌も出してくれる。勿論、水浴びの為の洗面器まで準備されている。雀等には吾が庭は、常世の国に違いない。



（絵：兼平智恵子）

お犬様はエアコンの下から動くこうとしない。明日印刷の会報の編集は、珍しく順調に終り、夕食後少し仮眠と寝込んだら、毎日のやる事が押せ押せで遅れてしまった。（2016年7月8日）

・激しき雷雨来て空梅雨店しまいで猛暑

僅か一時ではあったが、雷が轟き大粒の雨が土砂降った。もう少し長く降ってくれたらと思ったが、局地的にかなりの量の雨が降ったようだ。

今日は、お犬様、ワクチンを打ったものだから何となく体が怠いのか、冷え冷えマットの上にベタツと腹這ったまま薄目を開けて軒を覗いていた。何時もとちよつと調子が違うことが分かるのか、黒猫の椿ちゃんがお犬様の顔を頻りにスンスンしに行く。お犬様は、そつとして置いてくれと言いたげに片目を開けて椿のすることを見ている。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。
木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178
伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297
編集事務局 〒315-0018 石岡市若松 1-5-38（木村）
HP <http://www.furusato-kaze.com/>

雨の降る前。雨雲がわかには広雀らが急に大騒ぎを始めた。どうやら雨の降る前に餌を頂戴と言っているようだ。それでは、と玄米を撒いてやると、小生が退く前に雀らがやって来て啄み始めた。如何に雨が降りそうだとは言っても、以前には考えられないことである。毎日二度の餌まきで小生への警戒心を少し解いてくれたようだ。雨が降り出す前に撒いた玄米はきれいに平らげられていた。大雨が降り出したので、梅の木の葉陰を出て軒下にでも来るかと思ったが、全員梅の葉の陰に止まっていた。水鳥のように良く水をはじく羽なのだろうな。

石岡の登録文化財

兼平智恵子

昭和二十四年（一九四九）一月二十六日、奈良県斑鳩の法隆寺金堂の壁画が炎上、焼損する。この事が契機となり、文化財を保護する為の文化財保護法が、翌年昭和二十五年（一九五〇）五月三十日に制定されました。

日本の歴史や文化を理解し未来の文化向上発展の礎となる文化財を大切に保存し活用することを目的とし、貴重な財産である文化財を保護し、その価値を失う事なく、未来に伝えていく為のものである。

文化財には国指定文化財をはじめとして、各都道府県市区町村が、それぞれの文化財保護条例に基づいて指定する文化財があります。

これら文化財の指定は、所有者からの申請でなく、文化庁や教育委員会が調査を行い、専門家による審議会を経て決定される。

文化財は活用され続けることが大切で、近年文化財への関心が高まり、指定文化財より、ゆるやかな制限で文化財の保護や活用する事の出来る法律が、平成八年に誕生しました。

その法律は、消滅の危機に晒されている建造物など従来の指定制から届出制のゆるやかな保護法で、文化財保護法に基づいて国が文化財登録原簿に登録した有形文化財である。

石岡商工会議所（株）まち未来いしおか発行の「まちなかの登録文化財」のパンフレットより：登録文化財とは……

平成八年文化財保護法の一部改正によりスタートした建造物の登録制度です。

建築後五十年を経過し、「歴史的景観に寄与し

ている」「デザインが時代や建造物の種類の特徴を示している」「優れた技術が用いられて再現することが容易でない」の基準にあてはまる住宅・事務所・社寺・橋・水門・トンネル・煙突などの建造物がその対象となります。

外観を大きく変えなければ、レストランや資料館などの事業資産や観光資源として利用することが可能で、「活用しながら次の世代に伝えていく」ということを目的としています……

このパンフレットからですと石岡では看板建築といわれている和風造りが三軒、商家建築といわれている和風造りが六軒、商家建築が一軒、造り酒屋（母屋・長屋門・文庫蔵・穀蔵・仕込み蔵・釜場・春屋の七棟が登録）の十一軒が登録文化財として紹介されています。

この十一軒の中で看板建築と言われている洋風造りの六軒の中から数軒紹介します。

昭和四年三月十四日夜、石岡の中心市街地は大火事に見舞われました「石岡の大火」として語り継がれている大惨事です。

現在の石岡駅から真つ直ぐ西に向かう八間道路（御幸通りとも）丁字路まで進み、左側一帯旧中町、旧金丸町、旧富田町の一帯で、中町の一角から発した火は強風にあおられ、一帯が火の海になるまで二十分もかからず、市街の四分の一（六〇六戸、一七〇〇棟）を焼失してしまいました。

この頃東京では大正一二年九月におきた「関東大震災」の復興中で人々がバラック暮らしを余儀なくされ、このバラック建築は周辺部の「看板建築」の起こりと繋がっていききました。

看板建築は、関東大震災後に多く取り入れら

れた建築で、耐火性のあるモルタルや銅板、タイルなどで西洋風の装飾が施され道路に面して垂直に立ち上げ、野外広告看板のような建築で、ほとんどが店舗兼二階建ての住宅となっています。

石岡の看板建築はほとんどが石岡の大火後に建てられています。この中にたった一軒、大火前昭和三年に建てられた「平松理容店」は現在も当時の建物で営業されていて、石岡で確認されている限り最も古い看板建築です。

この平松理容店の看板建築を手がけた左官職人こそ関東大震災後の看板建築の工事に携わって西洋装飾の基礎を学び腕を磨いて、火災後の石岡の新しい街並みづくりに大きな足跡を残した土屋辰之助です。



中央に
立つのが
辰之助

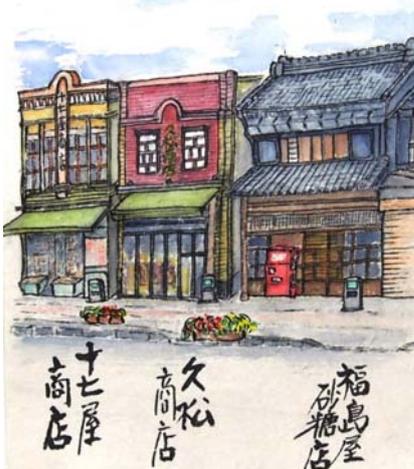
土屋辰之助は明治二十六年に千葉県神崎町の旧家、郡司家の次男として生まれ、同県佐原の左官職人の下で五年程年季奉公した後、東京へ出て左官の修行を積んだといわれています。

辰之助は大火後、同志を全国から呼び寄せ（二十四人の左官職人を束ねていたという）活躍しました。

●人造石洗い出し仕上げ：モルタルに大理石や玉石を混ぜ自然石のような風合いを出す技法。

●板金の打ち出し技法

看板建築三棟（三棟ともモルタルで饅仕上げ）
久松商店：金属板下見板張り
十七屋履物店：持送風の柱頭飾り



す可や化粧品店：ペディメント、コリント・イ
オニア式風柱頭飾り



セメント（粘土と石灰）に砂と水を加えたモル
タルを饅で仕上げた石造りのような重厚感と
優れた技法を現地での一瞥をお勧めします。

因みに東京の看板建築は中央区二十九棟、千

代田区十四棟、台東区十五棟、文京区五棟

参考資料 企画展記録集1.

○凜として陽射しを浴びてサラダ菜

智恵子

地域に眠る埋もれた歴史（98） 木村 進

【まほらの里】（6） 古代に夢をはせて

（一） 藤内神社のフジ

水戸の藤井町に藤内神社というかなり古い神社がある。この神社は後で紹介しますが、神社の入り口近くの通りの反対側に「藤井神社のフジ」と書かれたかなりの古木がある。



これが本当に藤の木なのかとみてもなかなかわかわらない。石の案内看板の側面にこの木の謂れが書かれている。（言い伝え）

源義家（八幡太郎）が前九年の役で奥州征伐に行

く途中、この神社に武運長久を祈願した。

その時に御手洗の池にあったフジの枝をとって鞭を作り軍団を指揮した。このため「藤井」という地名が生まれた。この藤内神社は常陸風土記などを考えるとき、一度は訪れたいと思っていた。

しかし、今の神社を見てもイメージはわいてこなかった。ここに来るまで高台から下って、那珂川の支流の川がそばを流れるこの地にやってきた。

またこの先にはこんもりとした森があり、昔の人はこんなところが住みやすい場所だったのかと複雑な思いがした。私は「藤」は「蛇」や「竜」を表しているのではないかと考えているのですが、ここにきては良くわからなかった。

（二） 藤内神社（水戸市藤井町）

古神社「藤内神社」は、思ったより周りは開けていない場所でした。この前で紹介した藤の木がご神木ようです。藤の木は神社入口より左手側の道路を隔てた反対側にあります。ご神木が境内にないのは珍しいです。



この神社の創建の由来が書かれていましたので紹介します。

由緒・

養老5年6月創立(721年)

当社の遙か西方にそびえる朝望(房)山は磐筒男、磐筒女の神の御子経津主命の神山と伝う。養老5年4月12日の暁、朝望(房)山の峰に靈光が輝き、その光が藤内郷を指して降りこのところにとどまった。人々驚き恐れ、謹んで同年6月15日社殿を竣工させ鎮斎した(祝詞)

この藤内神社の祭神は「経津主命」(ふつぬしのみこと)です。

香取神宮の祭神と一緒に、このあたりには7〜8世紀ごろに物部氏の一族がいたのかもしれない。

康平5年(1063) 源義家征奥の途次、当社成亥の峰に十万の勢を集め当社に武運長久を祈願し

社前の藤の枝を申し受けて鞭として勇氣凜凜進軍した。兵を集めたところを十万原という。

大永年間(1521〜28) 出火し社殿神宝消失。乱世で社殿再建できず百余年を経て、寛永5年

(1628) 宍戸城主秋田河内守が造営した。後元禄年中(1688〜1704) 水戸藩主徳川光圀公命で改築した。

藤内大明神と尊称。奉職人数もその当時42人おり、正保年中(1644〜1647)でも15人が奉職していた。

ご神木・藤の木 神池のおお櫨に藤がからまり、この藤は村名の起因ともなっている。

さて、ではこの前に見た大木は櫨の木だったのか。もう一度よく見てみよう。



そうだ。やはりこれは櫨の木だ。

ご神木の藤は木の根元の部分に巻きついていく。

やはり藤(藤)＝蛇神 であっているようだ。古事記に出てくる「三輪山説話」がやはりこの地にも伝わったようだ。

今の神社を見てもあまりわからないが、この藤の木をよく見れば何となく気持ちが伝わってくるように思う。この木の麓は確かに池があったようだ。今でも水はある。神池のところに大きな櫨の木があった。そこに山藤の木が巻き付いていた。蛇神信仰もこの藤が神様だという。

藤は蛇にもなるし山にも登る。人間にも化けて女を懐妊させる。

生まれた子供は神の子となる。

そしてこの話は石岡にもそのまま竜神山に伝わる。麓の部落も片岡と呼ばれた。

なかなか面白いですね。

藤井町、藤内神社、藤井川、藤井湖・・・ 三野輪池・・・ いろいろおもしろそうだ。

笠間市小原の三本松での神の林はやはり同じ思想の流れのようだ。

三本松に巻き付いた藤の木を切ったら祟りにあったという・・・

今でもこの信仰は残されているのかもしれない。

(三) 大井神社(水戸市飯富町)

「藤内神社」の創建が養老5年(721年)でその祭神が「経津主」というこのあたりでは珍しい香取神宮の神と同じ。今度は、その少し南の飯富町にあるやはりかなり古い古社「大井神社」を紹介します。社伝によると、第10代崇神天皇の時代に、崇神天皇の皇子・豊城入彦命の命によって

建借馬命(タケカシマノミコト)この地にやってきた。そして、そして長者山に館を構え、その北東にあたるこの飯富町の場所に神社を建てて天照大神を祀ったのが創祀だといえます。

今はこの神社の祭神はこの「建借馬命(タケカシマノミコト、常陸国風土記では建借間命)」で、建借馬命は初の古代那賀(仲)国造になった武人だ。崇神天皇の時代は推定するに、3世紀から4世紀初めと考えられる。

建借馬命は長者山に館をかまえたところがあるが、長者山は台渡里近郊である。ここに那賀郡の郡衙があった。日本書紀では崇神天皇は二人の息子である豊城命(豊城入彦命)と活目尊(いくめのみこと)に対して、自分の後継者をどちらにするかをそれぞれが見る夢のお告げで決まるといった。

豊城命は「御諸山(三輪山)に登り、東に向かつて槍や刀を振り回す夢を見た」と答えた。

活目尊は「御諸山（三輪山）に登り、四方に縄を張って雀を追い払う夢を見た」と答えた。その結果、弟の活目尊が後継となり、豊城命を武器を使って東国を治めさせるために派遣した。この豊城命の墓といわれるものが石岡にある。柿岡の「丸山古墳」だ。



この大井神社は一段高い台地の上にあり、東側に入口鳥居がある。

そして階段を上って神社に参拝するのだが、私は西側の神社と同じ台地にある西口から入った。

大井神社という一見単純そうな名前だが、この大井神社と地名の飯富町のいわれがよくいわれており、建借馬の出であるとされる肥の国（九州）の意富臣（おふのおみ）から、この神社は意富比（おほひ）神社と言った。

それが転じて意富比（おほひ）↓おおい↓大井となり、地名も意富↓飢富↓飯富と変じたとい

われている。このあたりの歴史はかなり面白いが、石岡も負けてはいない。もう少し探ってみよう。

（四）有賀神社

「藤内神社」「大井神社」と関係がありそうな「有賀神社」を紹介しておきたい。

場所は前の2社が那珂川沿いなのに対し、こちらには内原に近い方に入った場所で朝房山の南東部になる。古墳公園も近いし「木葉下（あぼつけ）」「大足（おおだら）」も近い。



この神社の創建は貞観元年（859年）と言われて

います。言い伝えでは最初に藤内神社と同じ藤井町に建てられ、やはり「藤内神社」と呼ばれていたという。このため、延喜式に記載されている式内社の「藤内神社」のともに論社とみられている。

祭神は「武甕槌命」と「経津主命」の2柱である。この「武甕槌命」（タケミカヅチ）は「存じ鹿島神宮の神であるが、これと仲国造で大井神社の祭神の建借馬命（タケカシマ）が同一かどうかは分からない。

11月11日にこの有賀神社の「神霊が大洗磯前神社に渡御する「磯渡御」という行事が行なわれている。

大洗磯前神社側の説明では、有賀さまは、大洗さまの側室の娘さんで、気立てがよく1年に1度親孝行のためにおみやげをたんと持って大洗に里帰りしてくるのだという。なんとも今風な解釈です。

（五）古代に夢をはせて

ここまで書いてきた「藤内神社」「大井神社」「有賀神社」の三つの神社の関係を少し眺めてみたくなった。次ページの地図に水戸市の西北部の各神社の位置関係を示します。

西側にある山が水戸では一番高いという朝房山（現地の山には朝望山とある…標高はたったの201m位）で、常陸風土記で書かれている晡時臥山（くれふしやま）と考えられている山だ。

この山が笠間市、城里町、水戸市の3つの市境にある。そして地図の右側（東）には大きな那珂川が流れ、丁度蛇の蛇行のようにくねっているところに台渡里遺跡、台渡里廃寺跡、長者山など古代那賀国の中心地（国造が館を構えた？）あたり

で、律令制の時に整備された官道の駅家(うまや)があった。(那珂川の向こうにも駅家がありここから官道は海沿いに行く道と、そのまま北に行き東山道と連結する道の二手に分かれたようだ。

常陸国の国府からこの台渡里駅家までは、鹿の子遺跡のあたりから現在の常磐高速の東側を沿うように真っ直ぐな道が伸びていたものと思われる。ここはまさに直道(ひたみち) 常陸?と言えなくもない。

少し地図を見ながら時代をさかのぼって考えてみよう。

3世紀初め頃、建借間(たけかしま)命は、崇神(すじん) 天皇の皇子で東国征伐にやってきた「豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)」の命を受け、さらに北の征服に使わされました。

3世紀と書いたがもう少し後だろう。この建借間命の墓といわれる古墳が水戸にある愛宕山古墳で築造は5世紀後半から6世紀初め頃と言われている。

最初は霞ヶ浦の南端側の浮島あたりで、湖(当時は内海)の向こう側(潮来あたり)にいる部族が敵か味方かを煙の流れる方向で占った。

それで敵と分かって軍団は船で向こう岸に着き、敵をやっつけようと思ったら、原住民は皆、すみかである穴に隠れて出てこなくなってしまう。

そこで知恵を絞って部下たちに浜辺でにぎやかな歌や祭りを連日連続させたら、原住民もつられて見物に出てくるようになった。そこを一網打尽にしてみんな殺してしまっただけです。

そこから、北浦を通って?那珂川に入り込み、川を北上します。



丁度よい肥沃な高台(台渡里)を見つけて館を建て、そこをさらに北への征服の根拠地にします。

建借間命は九州の部族の出身で神武天皇の御子「神八井耳(かむやあみみ)命」の末裔といわれ、「意富おふ・おほ臣」の名の部族の者とされ、おり、オホ氏(多氏)と同じ部族の人物と考えられます。そのため、この館から北の飯富町に大井神社を建てて、自分たちの祖をまつたものと思

われます。そのため、この館から北の飯富町に大井神社を建てて、自分たちの祖をまつたものと思

われます。

(飯富も大井もともに自分たちの種族の名前から来ている?)

さて、その後はどうなるのでしょうか?

一つはここから海沿いを北上したところの日立の手前の大甕(おおみか)神社と鹿島神宮にヒントがあります。

鹿島神宮の境内に撰社である「高房神社」があります。この神社を調べていて知ったことですが、高房神社は常陸国二の宮である「静(しず)神社」とも深くかかわっています。

祭神は「建葉槌神(たけはづちのみかみ)」です。日本建国時にこの鹿島・香取の地を制圧して大和朝廷はさらに北を目指しました。

しかし、北の方には星を祀る信仰を持った一族が住んでいました。

「天香香背男(あめのかがせお)」です。タケミカヅチの武力でも制圧できない大きな力を持っていました。

このため、この天香香背男を倒すために「建葉槌(たけはづち)」が使われました。

そして、日立市の手前の大甕(おおみか) 近辺に香香背男という蝦夷の大きな勢力が存在していたのでしよう。

建葉槌はこの「香香背男」を制圧したのです。神社では大きな「宿魂石」にその力を封じ込めた

といわれています。

そして「大甕神社」にこの建葉槌神（たけはづちのかみ）が祀られました。

この建葉槌神はまた「倭文神（しずりのかみ）」とも呼ばれ、織物の神様としても知られます。

この倭文神として祀られているのが常陸国二の宮である「静神社」なのです。

ただこの制圧した時代がよくわかっていない。

6世紀半ば過ぎころではないかと推察されるが・・・

ところでもう一つの物部の経津主命を祀る「藤内神社」はというと、こちらは年代が書かれていて、養老5年(721年) 4月12日の暁、朝望

(房)山(経津主命の神山)の峰に靈光が輝き、その光が藤内郷を指して降りこのところにとどまったとされる。これはもう律令制の始まったころになる。8世紀始めだ。

初的那賀(仲)国造となる武人「建借間命(タケカシマノミコト)」は九州の種族(多氏)の人物とみられています。

その根拠は

1)今の潮来に舟で渡った時に、住処の穴に逃げ込んでしまった原住民を7日7夜の歌と踊りで

おびき出しますが、この時にうたったのが九州佐賀地方の歌「杵島曲」だといえます。

2)建借間命の墓とされる愛宕山古墳(水戸市愛宕町:136.5mの前方後円墳)の出土物で王冠などが見つかっていますが、これが九州の出土品の

特徴と一致するといえます。

3)潮来の大生郷(大生神社、古墳)などがこの一族のかかわりが考えられます。(元鹿島とも言

われます)

そうすると鹿島神宮(常陸風土記では香島の大神)に最強の武人といわれる武甕槌(タケミカヅチ)という神話にしか登場しない神を祀っているのも実際はタケカシマと同一とするとまずいことになるために創造された神かもしれませぬ。

さて、朝房山の東側の古墳地帯の話をしておきます。私はなんとなくかなり前から石岡から真つ直ぐ北上し、城里町の石塚で巨大な崖に直面するこの石塚街道が気になっています。

木葉下(あぼつけ)というかなり珍しい名前の地名があり、昔からいろいろな謂れが考えられています。

アイヌ語からハケ、パツケ、バツケなどの崖の名前に由来するという説を何となく信じていたのですが、通ってみるとこれが崖のある地名とする場所かと疑問を覚えました。

そして今ではこの場所から7世紀〜8世紀ころの須恵器の窯跡が多数見つかっており、どうも韓国南部の昔からの言葉で「焼き物を焼く人たち」というような意味がありそうだということを聞きました。この朝鮮半島南部の人たちがこの地にやってきて焼き物を焼いたのでしょう。

石岡の瓦会などの古代の窯跡も同じような種族だったのではないかと思います。

そばの古墳公園(牛伏古墳群)には多くの古墳があります。この古墳は5世紀〜6世紀末頃の築造と思われる。

どうも九州の多氏とは別な人種がたくさんいたように思います。

この石塚街道をさらに進むと石塚で大きな崖を下って下の低地にでます。

地名は坪(あくつ)です。そしてその先の那珂川との合流地点付近が阿波山、粟となります。常陸風土記では那珂川は「粟川」と書かれています。徳島の阿波も昔は「粟」と書きました。阿波の忌部氏(いんべうじ)がここまでやってきたのでしょうか。

想像は膨らみます。阿波山にある阿波山上神社は「スクナヒコナ」を祀る神社です。大国主とともに国造りをした小人のスクナヒコナは言葉もわからずガガイモの舟で日本にやってきた異国人です。

でも薬の技術や温泉掘り、金の採掘などに多くの知識を持っていました。これは朝鮮半島から渡ってきた人物でしょう。さて、想像はあくまで想像で、先には進みません。

上の地図には大足(おおだら)という地名を載せました。

ダイダラボッチがここにいたという伝説がこの漢字から生まれました。

そして朝房山が昔はもつと南にあつて、この大足地区で日がさす時間が短く穀物が良く採れないので、朝房山をダイダラボッチが北の方にうごかしたとの伝説が生まれました。

石岡にも大足(おおだら)という地名が八郷の太田地区にあります。

どうも足跡のような広い低地は砂鉄をとって製鉄していた跡ではないかと言われます。

好き勝手に想像するのは楽しいですね。

楽しかった日々

伊東弓子

父の子供の頃は地元でわんぱく時代、母は遠い異国の地で一寸淋しい時代を過ごしたという。幼い頃の友との思い出が少なかったと聞いた。中学・女学校そしてその上の学校の友、仕事の友、すべて遠方の人が多かったようだ。父も母も話の中では豊かなつながりを感じさせるもの多かった。話を聞いてみると一人一人の姿が浮かんでくる。子供の頃は正統時代、昭和に入ってから大人の階段を登り始めた頃、戦争のきな臭い中でもいきいきしていた二人の姿が伝ってくる。戦争に入る少し前、父は結婚して母を連れ地元に戻ってきた。まるで違った世界にきた母はたくましく道を開いていた。軍国主義から民主主義に変わった戦後、貧しくとも心豊かな生活を私ら子供に与えてくれた両親だった。

私の子度の頃は、すぐ近所に従兄弟がいた。当時建てたばかりの家は、猿かに合戦の舞台のように隠れたり走ったり、すっかり童話の世界の主人公のように振る舞って一日遊びほうけていた。卵や栗を隣町まで売りに行く時は、笠地蔵の物語のお爺さんの気持ちで出掛けて行った。遊びは隣近所に止まらず、塙中出かけて年代の違う男の子、女の子と一緒に遊んだ。夕方帰りぎわには必ずお互いに悪態を言い合って別れた。その輪は年令と共に広がり上玉里、高崎へと広がって行った。中学生になると田木谷、栗又四ヶへとつながっていた。木立の中の深い池の緑やお稲荷さんの静けさが不気味だった。沢山の想像をふくらましてくれた。籠を背負った婆さん達の悪口話しも、田で働く爺さんの姿も懐かしい。あんな姿や声は今の

農村の風景の中にはもう見ることは出来ない。

親の仕事を中心に私達姉妹が手伝っていたことは大人にとっても心を寄せ合う場であり、子供達にとっては楽しい遊ぶ場であった。嫁ぎ先にもすぐ近くに姉弟がいて子供達がいたから、田舎と違う町の生活も味わえた。年上の賢いお姉ちゃん達から子供達も似も刺激を受けた。しつかり者の姑かあさんから沢山教わるよい機会だった。

いつのまにか婆さんになって弟の所も妹の家も私の所にもぎやかだ。血のつながりはなくても遠く異国にいても息子、娘が心くばってくれたので、孫たちと心はつながっていた。夫の十三回忌を行うことになって写真を捜してみた。家の前の木陰で夏、一人一人が笑っている。部屋中広げ餅つきをしたあと、みんなでおぼけている子供達、上手とはいえない私の料理がこんあにあったのか、よくこしらえたと感心する。いやこれは私だけの作じゃない。半分以上は主人の手によるものだと思う。幸せだった頃の一枚一枚の写真、こんな日は二度とは戻ってこないだろう。今は一人でも息子がきてくれていて、頑張らなくちゃ。

孫たちが家庭を持つ時代となってきた。若い人が少ない。子供がいない。大井のは老人ばかり、とよく言われる。その老人たちが問題を起こす。無理もない、社会の動きについていくのが大変なのだから、能力も衰えているのだから……。言い訳言わずに一日一日確り生きていこうと思っている。それには友が必要。友と一緒に楽しいことを考えていこう。

小学校の時から仲良しだったKI MIちゃんと再会したのは十年以上になるだろうか。故郷へ戻ってきたのは年老いたお母さんと具合の悪い弟さん

の面倒をみるためだった。自分の体も大分辛そうだったのに一生懸命つくっていた。私は何をしてお茶をよばれるだけだった。これでいいの……。と、自分に問いかけながら、甘えていたの、KI MIちゃんの幅広く奥深い話しを聞くのも楽しいので、ついつい足を運んでしまっていた。思い出は二年生の時の受け持ちの先生の家に高浜まで行ったことや、五・六年生時、薄暗い音楽教室でオルガンを弾いた懐かしい毎日、何曲弾いたか、私は「荒城の月」だけを覚えていて。弾きながら唱い、満足だったあの頃、その思いが今につながっているのだろう。大事にして付き合っていたい。

妹が行っている所で、遠くの方から優しい人が見てくれているのに気が付いた。その人がある時「TO DA ゆみちゃんですか」と声をかけられたという。妹は私の友のことを知っていたので、いきなり返事をするのも…….と思いい、「HI DE O さん」してますか。「KI MI ちゃんは…….」と問いかけると、一人一人の事を答えてくれたという。わついはHU SA といいます。YU MI ちゃんとは仲良しだったんですという。私は驚いた。ああHU SA ちゃんなつかしい。あれから何年経っただろう。わたしは田余小学校、HU SA ちゃんは田余第二小学校だった。小学校の頃は覚えがないが、田余中学校になってから一緒だった。優しい人柄にひかれ三年間何かにつけて一緒だった。早く結婚したので、それぞれの生活で会うこともなかったが、その後同窓会には良く参加してくれていた。いつも明るく優しい雰囲気だった。妹は「そんなに私とTO DA ゆみちゃんがにてるのか」聞いてみたら、「似てますよ」とのことだったとか、何回か会う

なかに TODA ゆみ子の妹だということをはなした
そうだと。そうだったと納得したようだったとのこ
と。近い中に会いに行こうと思っっている。楽し
半分、不安もある。これからはずっと行ったり来
たりしたいと思う。待っててね HUSAちゃん。

高校の時、特別知り合っていた訳ではなくても話
をしたり、知る機会があったことは共通点をもっ
ていたことではなかつた、これからもつなげてい
きたい。高浜の町の同年の人に何人か会う機会が
あった。その中で「小学校時代、下玉里の学校へ
行ったりしたよね」という話から遠い昔がよみ
がえり、写生会のあと、一緒に話したかもしれない。
運動会の後、帰りに見送ったかもしれない。
接点を持つていたかもしれないと思うと、すごく
恋しくなったりした。この人とも今まで話しをし
なかつた空白の時間を埋めていこうと思う。

今楽しくなることってあるかな。今、地域で考
えることあるかなと考えてみた。

・近くに住んでいながら、一緒に行うことがない
のはだめだ。

・話しかけ合わないのはだめだ。

・行ったり来たりしないのはだめだ。

と、つくづく思う。

今までの楽しかったことを思い起こし、懐かしい
一人一人と話したり、何か一緒にしたり、してい
こう。

(令和七年六月二十七日)

出る釘は打たれる

伊東弓子

今までもいろいろな事があったが、この春に
は今までもなく衝撃なことが続いた。その後の立
ち直りに時間がかかった。人には言えず遠回しに
他の出来事のように、極々親しい人に智慧をかり
たりしたが、悲しい己の姿を眺めるように何度も
何度も出来事の一斉を振り返ってみた。時間が解
決してくれるという言葉もよく聞くが辛い毎日だ
った。優しい人のいるレストランに行つてコーヒ
ーを飲みながら、他愛無い話しをして気を紛らわ
した。門前で佛の顔を眺めながら、心で叫んでい
た。

丁度、鼻から若葉への田園の風景は心の痛みを
和らげてくれた。道端の花々も目に問いかけてく
れた。「人を疑う前に自分をみるのよ」

心を立て治すために一日一日を確り生きようと
思い始めていた頃だった。

そんな時、ある人の話しに励まされた。前号で
愚痴っていた柳の木のことだった。霞ヶ浦の水際
には必ず生えていたそうだと。そう私も子供の頃よく
みた波が運んできたものだろう。大きい木、小さ
い木さまざまだったという。波はその際で力をゆ
るめるかのようにゆっくり波打つて、田と湖の境
に自然の防波堤が出来ていたようだ。秋には葉を
落とし、あつまつた草木の床は魚や虫の宿になつ
て生命を育み、やがて沈んで土となつていった。
田側から考えると水量によつては被害を被つたが、
それも大きな自然の営みだった。春は周囲の草木
と若葉の姿を競い合い、夏は大きな傘となつて木
陰をつくり、秋の彩りの姿を水鏡して、教知れぬ
葉を散らしていった。冷たくなつた水面には暖か

い太陽の光を送つて枝は霞ヶ浦の木枯らしに耐え
てきたのだと話してくれた。切り株からも必ず芽
が出て来るよ！と、その人の話の中から、大き
な営みを改めて思い、とても気持ち楽になり、
穏やかになつた。辛かつた二ヶ月近く胸を覆つて
いた重い雲が飛んでしまったように軽くなつて、
土手の上から切り株から芽の出でくる日を待つ今
の私。

ごみの事でもひどい非難を受けたが、私は私な
りの方法でやつていこう。春から辛かつたことも
乗り越える力が湧いてきた。

こういう私、残り少ない人生も「打たれながら
行くのだろう。母の優しい言葉を思い出しながら
どうしようもない時分を見つめている。

遠い日小学校の高学年の頃だった。男生徒に追
いかけて長い廊下を走り、渡り廊下をバタバ
タ走つていた時、教頭先生に後ろから呟鳴られた。
「こらー、TODA！廊下は走るんじゃないだろ」

「だって」と、いおうとしたら、男生徒はもう
いなかった。

「あの人が悪いんだ」と、うらみがましい気
持ちで部屋に入った。しばらくして渡り廊下をな
おしている教頭先生がいた。

「だんだん 釘もゆるむし、穴も大きくなつて板
がはがれるとあぶないんだぞ」と、さつきとはう
つて変わった先生の声の響きに何故か安心した。
家に帰つて母に愚痴ると、「あんたも男性に何か言
つたんでしょ。あんたにも原因があつたんでし
よう。これからもそういう場面に会うことがある
から、気を付けてね」「みんなが走るから渡り廊下
の釘もゆるむのよ。出る釘はうたれるのよ」

母は、こんな私をどんなにか心配していたことだろうか。

香仙寺

小林幸枝

香仙寺は常陸太田市松栄町にある不軽山莊巖院と称する浄土宗の寺院です。開基帳によると、永享4年(1432)に常福寺(那珂市瓜連)三世明誉上人によつて開かれました。公開する文化財直牒洞の石仏(じきてつどうのせきぶつ) 県指定文化財(昭和45年9月28日指定) 香仙寺東側の山腹に奥行11mの岩窟があり、その中央の奥室後壁に、阿弥陀三尊像が彫られています。



阿弥陀如来坐像を中央に、右側に観音菩薩立像、左側に勢至菩薩立像が刻まれており、平安時代後期に作られたものと推定されます。旧瓜連町(現那珂市)常福寺第2世了誉聖岡(りょうよしょうげ

い)上人が、常福寺の類焼や佐竹の兵乱をのがれるために嘉慶2年(1388)から應永3年(1396)までの間この洞窟にこもり「決疑鈔直牒」10巻を著したと伝えられており、これが直牒洞の名前の由来になつていると考えられますが、置かれていた可能性のある穴の存在が確認されました。文化財の一般公開では、阿弥陀三尊像が照らし出された状態で見る事ができます。(中央の洞窟…直牒洞)



香仙寺のシイ 県指定文化財(昭和46年1月28日指定) 根本周囲約12m、目通り周囲約9.5m、樹高約25m、推定樹齢約600年で、シイとしては県内有数の巨樹です。今年の常陸太田市香仙寺の文化財の公開日は10月18日(土)の15時30分までだそうです。機会があれば、見に行きたいと思います。



東アジアの仏教見聞録を尋ねるⅢ 西方保男

前号より、仏教天台第三代座主円仁の中国求法の観察録を記す。

七月十五日。中国皇帝武宗の勅旨

また勅がくだつて全国の山林寺院、普通院(巡礼者のための宿泊所)、仏堂、公共の井戸、村の供養堂などで二百間未満のものと、公的に登録されていない寺は破壊し、そこに属する僧や尼僧らはすべて強制的に還俗させて雑役に充てよ。これらの状況を詳しく分析して天子に報告せよという。小さくても長安城内の坊にある仏堂三百余カ所の仏

像、経を安置してある楼などは莊嚴で仏道にのつとつており、すべてこれ名工の作るところであつて一カ所の仏堂、寺院でも他州の大寺に匹敵するほどのものである。しかし、これらも勅に従つて全部壊わしてしまうという。諸道にある全国の仏堂・寺院等で破壊されるものは数えきれないほど多い。

全国の尊勝石(せきどう)、仏頂尊勝陀羅尼経や尊勝陀羅尼を刻んだ石幢(脊柱)に台座、屋根をつけたもの、僧の墓碑なども勅によつて皆破壊されてしまった。天子は勅によつて国子監中央学問所)の学士と全国の科挙(高等官吏試験)の及第者や学芸を身につけた者を召して道教に入らせようとしたが、かつて一人もその道に入る者がなかった。

今年になってから雨の少ない時はいつも、功德使が勅に従つて多くの寺や道教寺院に通達して読経を行なわせ雨乞いの祈りをさせたが、その結果天の感応があつて雨が降ると、道士だけに限り恩賞が与えられ僧尼に対しては全くなんのごさたもなかった。長安城中の人たちが笑つて言うには雨乞いの祈りをするときは仏僧をわずらわしながら、恩賞ということになるとひとり道士にばかり偏つて与えていると。

八月中ごろ太后が亡くなられた。姓は郭氏とい

い大和皇后である。太后は宗教心が厚く仏法を信じていたので僧や尼僧の取り締まり、整理、強制還俗を行う条令が出るごとに、いつも天子にいさめの忠告をしたので皇帝は薬入りの酒を進めて毒殺したのであつた。また義陽殿皇后氏は、現天子武宗の義母で非常に容貌の美しい人であつたから、天子は召し入れ

て妃としようとしたが太后は拒絶した。そこで天子は弓を放つて射殺してしまつた。矢は胸深く突き刺さつて亡くなつたという。

太原府(三西省)の兵馬三千は三年の間廻鶻軍(ウイグル)との国境守備の任にあつたが、今年廻鶻軍を打ち破つて太原府に凱旋してきた。まだ幾日にもならず、まだ家族の者とも面会していないのに節度使は即刻、ウイグル軍を討伐するために進発させようとした。兵士らは再三にわたつて行きたくないと訴えて言うには「三年のあいだウイグルを討伐し、つらい苦しい思いをして疲労欠乏している。最近になつてやつと家郷に戻り着いたがまだ父母妻子に会つていない。どうか他の軍団を派遣するようにしてほしい。」と嘆願した。しかし節度使は聞き入れなかつたので兵士およそ三千人の恨みが一時に爆発し、太原城に迫つて攻撃を加えた。節度使は天子に報告し反乱軍を捕らえて京城に送つた。天子は勅して軍を出して迎え入れ詳細に当事者から事情を聴取した。その人は「ウイグルを討伐した功は大であり、これを無視して殺すというのはおかしいのではないか」と、具体的に事情を記録して上奏したが天子はそれを聞き入れず、勅によつて封刀を賜ひ反乱軍の将兵を三段に斬らせた。斬つた場所は長安京東の北街の塚のほとりである。捕らえられて露府から送られてきた兵士たちもいつもここで斬られていた。

九月。反乱中の路府軍が大敗した。そこで同軍の押街や大將らを捕らえ長安に送つて切り殺すこと六、七度に及んだ。その後反乱の首謀者淳劉從簡の頭部を斬つて長安に送られてくると三叉の槍の穂先に突き刺した。次いで高さ三丈余(約九メートル)の棹の上の方に反乱首謀者の名前を書き記し、まず東西の両市街を一巡して内裏に進み入つた。天子は銀台門の楼上にざしてこれを見、大笑して言うには「昭義軍節度使をばついに完全に破つた。今になつてもまだ除き終わっていないのはただ全国の仏教寺院の整理と僧尼の強制還俗である。卿らはこのことがまだ全部片づいていないことを知っているのかどうか」と。

数十日の後、勅に従つて路府劉家の財産、錢や物、宝玉(大帯に付ける飾り玉)、家具等を没収、官に収めた。毎回七、八台の金で装つた車に満載して場内に送つて来たものを宮廷内に納め入れたのである。仇士良觀軍容使の子は内常侍で内侍省の大官であつたが、たまたま酒を飲んで泥酔し誤つて天子の顔にふれ、面と向かつて「天子は本来尊い者であるというけれども、もとをただせば私の父親が擁立したからではないか」と言つた。天子は怒つてすぐさま撃ち殺し、勅してその妻や子女を逮捕して長安城外に流刑とし、髪を削らせて陵の墓守とした。そして宦官に仰せつけて家中の錢や物を没収したところが、象牙は部屋一杯、珠玉金銀等もいづれも皆、蔵に満ちており、錢や絹の數量は数えことができないほどたくさんあつた。皇帝はこれらを収納した内庫に見に行き手を打つて「朕の庫でさえもかつてこれほどの物があつたことはない」とびびくりして言つた。多くの高官たちは頭(こうべ)を垂れて一言もなかつたという。

いまになつても、まだ除き終わっていないのはただ全国の仏教寺院の整理と僧尼の強制還俗である。卿らはこのことがまだ全部片づいていないことを知っているのかどうか」と。数日の後、勅に従つて路府劉家の財産、錢や物、宝玉(大帯につける飾り玉)家具等を没収、官に収めた。毎回七、八

台の金で装った車に満載にして場内に送って来たものを宮内庫仁納め入れたのである。

皇帝はこれらを収納した内庫に見に行き手を打って「朕の庫でさえもかつてこれほどの物があつたことはない」とびっくりして言った。多くの高宮たちは頭を垂れて一言もなかったという。

道士の趙焯真らが天子に申しあげて言うには、「仏陀は西方えびすの国インドに生まれ、“不生”の教えを説きました。しかしその“不生”とはただの死ということに過ぎません。人を教化して涅槃に入らしめると言いますが、涅槃とは結局死のことではありません。

そこで盛んに無常、苦、空の理を説きますがこれはまことに奇怪なまやかしの説でありまして、道教で言う無為長生の原理に及ぶものではありません。太政老君(老子)は聞くところによりますと、中国に生まれ最上天であります元始天尊の居所大羅天を本拠として、無為自然に逍遙し教化します。仙人の作つた不老長寿の薬を調剤してこれを服用すれば、長生きができ、広く神仙界の一員となつて限りなく大きな利益を得ることができません。どうか宮内に神仙の台を築き立て身体を錬磨し登仙し九天に逍遙し給わらんことを。乞い願わくば天子の寿命に福(さいわい)あり、永く長生の樂しみを保つことが不老長寿の薬を調剤し、これを服用すれば、長生きができます。どうか宮内に神仙の台を築き立て、身体を錬磨し登仙し九天に逍遙し、永く長生の樂しみを保つことが出来ますように、云々」と。皇帝は「よろしくそのようにせよ」と言われた。

*天子の仏教に比して道教への信奉の深さが

覗える。

十月。天子は左右両軍に勅して内裏の中に神仙の台を築かせた。高さ百五十尺(約四十五メートル)で、十月から始めて毎日左右両神策軍の兵士三千人を使つて土を運ばせ築造した。

皇帝はしきりに早くでき上ることを望んで毎日勅をくだして早く早くと築造を催促した。両軍の都盧侯(監視役)が棒をもつて巡検していた。皇帝はそこに行つてこれを見て内侍省の長官に聞いた。「棒を持つていまは何者であるか」と。長官が「護軍の監視役が台を築くのを監督しは棒を持つて監督する必要はない。自分から進んで土を担い運べ」と言つて土を運ばせた。このあとまた台を築いている現場に足を運び、皇帝自ら弓をとつて理由もなく監視役一人を射殺してしまった。なんとも無道の極みである。

去年からこれまでずっと左右両街の講説(俗講)は中止されたままになっている。現天子が天子の位についてからこれまで宮廷外に出遊することを好まれ、春夏秋冬の四時と立春・立夏・立秋・立冬・春分秋分・夏至・冬至の八節の祭日のほか、二日おきにしょっちゅう出遊されていた。行幸ごとに諸寺院に命じて床凡(しようぎ)やじゅうたん等の敷物を調達させ、花幕(幔幕)を椽に結び、椽・畳・台・盤(椀盤)・畳台・椅子などを設営させた。一度行幸があると、どの寺も四、五百貫銭の支出ではすまなかつた。また勅があり全国の小さき寺を破壊してその經典や仏像を大きな寺に運び入れさせ鐘は道教寺院に送らせた。そしてつぶされた寺の僧尼で行いが粗野であつたり戒律を守らない者は、老いも若きもかまうことなく全員還俗させ、原籍地に向けて駅から駅へと次々に逋送して帰し

雑役の員数に加えさせた。しかしたとえ戒律をよくまもつていても、もしこれが年の若い者であればすべて還俗させて原籍地に駅次で帰した。長安城の中では三十三カ所の小寺がつぶし壊され、その僧尼は整理されたが、これは一つに勅文に従つて行なわれたのであつた。

十一月。天子は勅を出して言うには「露府昭義の賊軍はすでに撃滅されたから朕は来年正月をもつて改めて南郊において天を祭り拝礼の儀を行う。よつて百官に仰せつけ諸職にさとし示して早々に準備せよ」と。百官はこの勅に従つて橋や道を修理し、天子のお通りになる道路は一般の人馬・車牛を通さないようになった。

長安城の南郊の壇は特別に造らせることになり、壇の四方の面に幔幕を張りめぐらした。楼閣その他の建造物はすべて長安城の南郊の壇は特別に造らせることになり、壇の四方の面に幌幕を張りめぐらした。楼閣その他の建造物はすべて長安城の内裏の様式をとつた。百官は当惑して悩みとどまることを知らなかつた。

会昌五年。(八四五)歳(ほし)は乙丑(きのとうし)に宿る

正月三日。天子は南郊の壇で拜天の儀を行なつた。行列のものものしい飾り立てはすべて会昌元年の時と似ている。しかし僧尼はその様子をみることを禁じられた。また以前出された取り締まり条令会昌四年三月、功德使の通達によつて、僧や尼僧は午後から外出することが許されていない。そのうえ午前には昼の食事の際の鐘に前に寺に戻らねばならなかつたし、鐘に間に合わなかつたからといって他の寺に行つて宿泊することも許されない。それゆえ僧尼は南郊の儀式を見ることができ

なかったのである。

一方、天子は神仙の台を築いて早く完成することを望んでいたが、勅して道士に不老長寿の仙丹を調査させた。道士の長趙帰真が天子に奏上しているには「普通の仙薬はありませんが、この国には仙丹が全くありません。ただし土蕃国(吐蕃国、チベット)にはこの薬がありますので、臣は自ら土蕃国に向いて行き、この薬を採って来たいと願っております」と。これを聞いて左右両神策軍の長官は反対した。そして上奏して「別の者を取りに派遣すべきであり、趙帰真は神仙台の長であるから自分からいくべきではない」と。

天子は長官の上奏にしたがったので趙は国外に出ることを許されなかった。また天子は勅して「不老長寿の仙丹には何の薬を用いるのか、品目をそろえて申し述べよ」と質問した。道士は薬の品目として、李子衣十斤(約6キログラム)、生鶏膜十斤、龜毛十斤、兎角(とかく)十斤等、龜の毛、うさぎの角(つ)などあり得ないもの、入手できるはずのないものを申しあげた。そこで勅を出して長安市内の売薬店で探させたが、そのようなものは全くないというのであり、申し入れた者はそんなもの冗談じゃない、あるはずがないではないか、とかえって打たれる始末であった。天子の悩みわずらいはおさまらなかつたので、さらに四方八方に手をうって探させたが、結局のところどうしても入手することができなかつた。

*日記を認める慈覚大師円仁の表情はいかばかりだったろう？

二月十日。寒食の節(冬至から百五日目、火で煮炊きした物を食べない)。以前からこれまでは式則

にしたがって公務員には七日の公休が与えられるのがならわしであった。しかし神仙台の労役人には毎日三千人の兵士が使われていたが寒食の節にも開放してもらえなかつたので、これを怨み道具をとり地に伏して三千人がいっせいに喚声をあげた。皇帝は驚きおそれて兵士一人につき三疋の絹を与え三日の休暇を許した。

三月三日。

仙台の造築が完成して天子に奉る式が行われた。天子は台上がり左右両神策軍の長官、諸高官、道士らも皇帝の後ろに随って上った。左右両軍の長官が趙帰真に語って言うには「今日は、仙台を天子たてまつり終わった。あなたらは不老不死の仙人になることができるのですか、どうです。」と。帰真は頭を垂れて黙りこくった。

聞くところによると、仙台は高さ百五十尺(約、四十七メートル)、いちばん上は周囲が円形で七間(柱間七間)の宮殿の基底と同じ広さがあり、この上に五つの峰をもつ樓閣が建てられている。内裏の中からも外からもすべての人々が遙かに見ることができて、まるで一つの山が高くそびえているようである。終南山から大きな岩石を運んで四つの山崖を造り、老子を祭った神像などを安置した厨子の岩屋や曲がりくねった岩の道があつて、そこに刻んだ飾りは美しさをきわめている。また松柏や珍しい木が植えてあり、ばかばかしい話ではあるが、これでやつと皇帝の意にかなうものができるがつたのである。そこで勅があり七人の道士にこの台上で仙薬を調査して飛化し仙人となる術を行わせた。また勅がくだって全国の寺院は莊園を置くことが許されなくなり、また全国の寺院が持っている奴婢(ぬひ)の数や合わせて銭、物、

穀物の数、絹帛の反数などを調べ、いちいち事実どおりに詳細に記録して天子に報告させた。

長安城内の各寺は左右両軍長官の検査を仰ぎ、諸州府の寺院は中書門下(内閣)の検査に委ねられた。また長安城内の寺院の奴婢の身分を三等級に分け、身に才芸のある者、若くて壮(さか)な者は売って貨幣に変え、老弱者は官の奴婢とした

“うれい泣き、父は南に子は北へと別れ別れになる”とはまさに今のこと、まことに悲しむべきことである。詩に“憂い哭(なく)く父は南、子は北”とあるはまさに今の寺の奴婢たちの境遇のことである。南北は事実上の南と北でなく別れ別れになること。“うれい泣く父は南に子は北に”とは父が北へ、子が南へと別れ別れになるとはまことに悲しむべき時であつた。

功德使はすべての寺に通牒して奴婢五人ごとに一保とし、この保の中一人が逃亡すると二千貫の罰金を科した。全寺の銭や物、それに奴婢を売って得た利益はいずれも皆官に没収して百官の給料にあてようとした。また勅があり全国のすべての寺で年四十歳以下の僧および尼僧は全員強制的に還俗させ、駅次ぎに送って原籍地に帰せと。天子はまた仙台にのぼり、勅して楽人に左神策軍の長官(揚欽義)を突き落とせと命じた。ところが楽人が命に従わなかつたので「自分が突き落とせと言っているのになぜ命令どおり実行しないのか」と詰問した。楽人は「長官は国家の重臣で大事な人です。だから突き落としませんでした」と申し上げた。天子は怒って背中を二十回むち打つ棒刑に処した。

参考 圓仁 入唐求法巡礼行記

手継神社の河童

山中のぞみ

寛正6年(1465年)の頃、芹沢隠岐守俊幹という荒原の郷を治める殿様がいた。時は室町時代の末期でやがて戦国の世へと移行行く頃であった。京都では將軍の権威がなくなり、地方では戦国大名が力をのびしていた。京の都を戦渦に巻き込んだ応仁の乱(1467~77年)も二年後に起っている。この時代は京都が政治・文化の中心地であった。関東地方には鎌倉府という役所を置き、関東一帯を支配するしくみがあった。俊幹はこの鎌倉府から派遣されていたやくにんである。府中には鎌倉府の出先機関があった。

俊幹は府中からの帰る途中で夜になってしまった。帰路を急いでいると芹沢の柳橋の所で馬が動かなくなってしまった。不思議に思ってから後ろを見ると、河童が馬の尾を引っ張って水の中に引き込もうとしているではないか。俊幹は刀を抜き河童の手を切り自宅へと急いだ。夜中になり俊幹のもとにさきほどの河童が懇願にきた。年老いた母を世話するために手を無くしては養うことができないと涙ながらに懇願した。俊幹は再び悪さをしないことを約束させ手を返したとされている。

河童は大変喜び、祖先より伝わる手継の葉を使いもとの手にもどすことができたという。翌日俊幹が川岸で昨夜の河童が死んでいるのを見つけた。不憫に思い「川上に流れよ」と祈念をこめて家に戻った。河童の亡骸は上流の与沢神橋に流れ着いた。知らせを受けた俊幹はそこに供養の社を建てた。手継大明神と名づけ手足の病はもとより田畑や水を守ったり、病をも治す神様として祀られている。その後永正4年(1507年)頃に現在の

地に移されたという。現在でも多くの人に信仰されている。

例祭は(10月9日)役員のみで行なわれている(コロナ以降)



【風の談話室】 《読者投稿》

やさと暮らし (81)

やさと女

やっとサクラが咲き始めた。やはりサクラは華やかだ・・・日々起きている異常気象・・・今後が心配ですね。高齢な私たち・・・どうなるのでしょうか、生きていけるのかな？

【4月】

・雨上がりの夕方久しぶりの散歩。花見をしながら目的は、たらの芽の下見。秘密の場所に行く小さかったけれど、天婦羅1回分ほどの収穫あり、初物です。

・やさとマチに来るまで25年も住んでいた東京南部の大田区蒲田。蒲田地域はJ A蒲田駅と京急蒲田駅が凡そ800メートル離れている。かなり昔から、駅間を繋ぐ鉄道の計画はあったが、やっと本格的な工事に取りかかるようだ。それに伴い京急蒲田駅から2分ほどのところで飲食店(居酒屋)を営んでいる次男の店も立ち退かなければならなくなった。新規の店を借りるのにあたり、息子から保証人の依頼があった。夫が手続きすると、暫くして年齢的に保証人にはなれませんと電話が・・・もう、そんなお年なのです。

・買い物帰り、車1台やっと通れる敷道を走った。左右は藪に覆われている・・・元は畑だったのかな。途中右側の藪には・・・なんとお宝が。天高く伸びた先にあるのはたらの芽。足元は藪、枝先は高い。トゲがあるので素手では触れない・・・車の中を見ると、傘とゴム手があった。夫は枝に傘の柄をかけ格闘したが、藪には勝てなかった。それでも食べごろ10本程獲得出来た。

・田んぼに水が入り始めた。近所のじいちゃん達はひと仕事終え、朝ごはんに帰って行きました。みんな元気です。うちのじいちゃんも何とか自然に生かされています。毎呼吸をきらしてタケノコほり、そしてポランテア、合間にたらの芽探し、あつという間に夜です。

【5月】

・ゴールデンウィークも中盤戦。2泊3日・・・やさととの田舎を楽しんだ姪夫妻が帰って行った。1日目はゆりの郷温泉、連休の合間の所為か空い

ていて穴場状態。2日目は笠間の陶炎祭で出店巡り・・・駐車場は大変混んでいて、駐車まで30分待ち・・・まあまあかな。200店舗程のテントをブラブラしながら買い物を楽しんで、その後道の駅やら、焼き芋屋やら、夜は石岡健康センターへ。サウナ好きの甥はこのサウナに入るのが楽しみなのです。そして今日は雨降り・・・やさとな豆工場で納豆を土産に帰って行った。今度来るのは、いしおかのお祭りかな。

・やさとの根小屋地域、山に囲まれた奥まった所にある水田。そこで5月5日毎年行われる、豊作を祈る常陸国総社宮の伝統行事・・・御田植。厳肅な神事の後、菅笠に緋の着物を着た早乙女が10人、献穀田に田植え歌にあわせて苗を植える。この山あいの水田まさに日本の田園風景。いつ頃だったかは街道だったようでひっそりと道標が残っていた。○当字ヲヘテかたの川又方面へ」と書いてあった。なんかロマンを感じる場所だった。

・暑かったですね、今日は茶摘みの日・・・茶畑として甦って11年とか？日頃からの整理作業に頭が下がります。私たちは茶摘みの時だけ楽しませてもらっています。新芽の柔らかい部分だけを一葉一葉摘んで行く。茶畑は斜面なので足の踏み張りもなかなかの物。汗が滴ってきた頃、楽しみのお弁当。新緑の中みんなでお弁当の美味しい事。またの楽しみは1年後

・野イチゴが畑に、蔓延ってしまい、厄介物になってしまった野イチゴだらけ(雑草)今の時期だけは嬉しい。草抜きの合間、おやつタイム。

【6月】

・朝から夏日より。2軒先の方、大手の園芸関係に勤めていたが、定年になり、わが家の延びきった木々の剪定をお願いしました。延びきり過ぎて、その上の暑さ、暫くかかりそうです。

・奥会津三島町に行って来ました。福島県の西の方、只見川沿いにある日本で最も美しいと言われている、豪雪地帯の深い山間部。ここで毎年この時期に工人まつりが開かれます。全国からもの作りの匠が集まり人口13000人？位の町が・・・それは、それは賑わうそうです。今年竹の師匠が厳しい審査がとおり出展出来ることになりました。縁あり三島町に詳しい方のお誘いがあり、1泊2日の贅沢な旅を楽しんで来ました。

・暑かったですね。梅雨はどこに行ったのだろう。今日で梅仕事も一段落。梅干し用に8キロ漬け込み、梅酒、梅シロップと造り大汗をかけた。午後外出していた夫が生ハムを買って帰って来た。メロンには生ハムだろう、そう言えば頂いたメロンがあった。早速・・・頂くとメロンの甘味に生ハムの塩味の相性がよく美味しかった。梅仕事の疲れも吹き飛んだ感じです。



桜川・真壁紀行 幡谷啓子

過日は、大変お世話様になり、有難うございました。とてつもなく濃い一日を過ごさせていただきました。山岳信仰というのでしょうか、筑波山を中心に、裏つくばにふるいふるい時代に建てられた社寺が、あのように今に残り、きちんと維持されているということに、感動します。

○ 上曾峠

むかし人歩くはかなき峠路を

アクセルさらに踏み込み登る。

○ 五所駒瀧神社

愛らしき丸葉は枝垂れ桂の名

杉森ふかく籠れ木洩れ陽に揺る

名の知らぬ木の葉の裂目数え合う

五所駒瀧神社ゆくりなく来て

縄張られ祝(ほ)がるるすだ椎永らうる

かぎりは抱く千年の夢

○ 雨引山楽法寺

嶺越えてマダラ大魔神に会いに行く

やまざくら霞む雨引山へ

雨引山ふるきを伝うる奇祭見んと

善男善女の車つらなる

急峻の段(きだ) かけ登る白馬の背

おどろ鬼面の大魔神が駆る

火振りの舞衰うる火に高まれる

声明(しょうみょう)は「南無家内安全」

盛り上る大魔神祭鬼の撒く餅

拾うわれも衆生(しゅじょう)のひとり

○ 椎尾山薬王院

阿吽の像在(いま)さぬ山門に

巡りゆく雨引山また薬王院
急坂を登れぬ脚は雨よけて立つ

人のえにしに幸(さち)をいただき
山ざくら謳うこの里山の手入れ

忘れれば増ゆると亡き祖父言いき
花冷えの体ほぐれゆく古民家の

親父がつくる味噌もつ煮込み
裏筑波は山桜の里山うち続き

目路の関東平野たしかに平ら

以下に今回見学した主要の「五所駒瀧神社」と「雨引山薬法寺」のマダラ鬼神祭を紹介します。(木村)

五所駒瀧神社

平安時代の長和3年(1012)の創建といわれ、当時この山に小さな祠が置かれていたという。



常陸平大掾であった多気直幹の4男(6男?)の平長幹がこの真壁に城を築いて真壁氏とな

り、承安年間(1171~1179)に鹿島神宮から武甕槌命の分霊を祀り、真壁氏の氏神としてまつり、「駒下瀧明神」と呼ばれていたようです。

明治6年に駒下瀧明神(駒瀧神社)に村内の4社(天満神社、飯綱神社、富士神社、日吉神社)を合祀し「五所駒瀧神社」となり、祭神も、武甕槌大神(たけみかつち)大山咋神(おおやまくひ)猿田彦神(さるたひこ)木花開耶姫(このはなさくやひめ)菅原道真公(すがわらみちざね)の五神を祀っています。

この神社は真壁町の総鎮守の社であり、7月に行われる「真壁の祇園祭」がこの神社のお祭りで30年の歴史があり、国の無形文化財に登録されています。この神社のすぐ下に「遍照院正得寺」という寺があり、この真壁氏累代の墓である40基ほどの五輪塔があります。

初代真壁氏の平長幹は北条の多気山に城を構えていた「多気氏で、平国香から続く常陸国平氏の本流でした。そしてこの(平)真壁長幹の兄(長兄)は多気義幹(たけのよしもと)は多気氏を継ぎましたが、小田(八田)氏の換言により源頼朝に鎌倉に呼び出されて、所領を没収されお家断絶となっていました。北条の町では今でも夏に多気太郎祭り(提灯行列)が行われています。また多気太郎の五輪塔が北条の町中にあります。

真壁氏は、戦国末期は佐竹氏の重要な家臣となっており、佐竹氏の出羽(秋田)転封に伴い、秋田角館に移りました。しかし、所領の領地はこちらよりもはるかに小さく、真壁氏に従って真壁から秋田へ移動した人数はかなり少なかったようです。この五所駒瀧神社から下った山

の麓にはこの真壁氏の城跡が広がり、近年になり、発掘調査もかなり進み「真壁城跡」として国の史跡に登録されました。

今年、石岡側から真壁側に「上曾トンネル」が開通しますが、真壁側のトンネル出口がこの真壁城跡の一端部分に通じるようになります。

マダラ鬼神祭(雨引観音)

4月の第二日曜日に雨引観音で「マダラ鬼神祭」が行なわれます。



二時をすぎた頃花火の合図で、鬼の面をかぶったマダラ神が白馬に載って一気に正面の石段をかけるのぼります。桜の花びらが降り注ぐ中を仁王門に向かいます。マダラ神の後には寺の僧が階段を上ります。その後ろから5匹の鬼がたいまつをかざしてやってきます。

のぼり旗の後ろから稚児行列が続きます。入口の薬医門から続く石段を鬼たちは登り、仁王門をくぐって急な石段をかけるのぼって本

殿に入ります。この雨引観音は真中の多宝塔と本殿の間に入口があります。



祭りは多宝塔の前の境内に竹で組んだ竹矢来（たけやらい）で祭りが行なわれます。

開始の案内の後に祝詞が読み上げられ、僧侶が日本刀をかかえて修拔（しゅうばつ）「お祓いが行なわれます。そののちに由緒などを含めた祝詞が読み上げられます」

正面の多宝塔の回廊にはこの日稚児行列に参加した子供たちと太鼓をたたく子供たちが並んでいます。その後、たいまつを手を持ったマダラ鬼神と白装束の6人の鬼神（白、赤、緑・・）が鬼踊りを披露します。その中で僧侶が真中に積まれた焚き木に火をつけます。鬼たちが手にした松明に点火して威勢の良い踊りを披露します。



一通り鬼踊りが終わると鬼たちが引き上げ、松明が消され、そののちに焚火の消火が行なわれます。この祭りでは、この後鬼たちが背にしていた49本の破魔矢を天に向けて放ち、これを観客が取りあいます。また餅がまかれます。地元ではこの祭りを日本で二つしかない鬼の祭りだと言っていました。もう一つは京都太秦（うずまさ）にある広隆寺（半跏思惟像の弥勒菩薩が有名）で行なわれる祭りです。

〈雨引山の祭りの起源〉

室町時代、文明3年（1470）に上杉氏憲（禪秀）が鎌倉方（足利勢）に対しておこした反乱に起因する。上杉方の武將長尾景信により足利方の古河城が奪われる。千葉まで逃れた足利勢が千葉氏などの仲間をひきつれて古河城を奪還、城を追われた長尾勢はこの雨引山に逃げ込んだ。

そして雨引山を囲んだ足利勢が麓から火を放ち、この薬法寺（雨引観音）は炎上してしまふ。本尊の薬師如来は自ら古木の陰に隠れて難を逃れたが、寺の堂宇は焼失してしまつた。しかし、その後どこからともなく、夜毎覆面をした職人が現れ、それを指揮した白馬に乗った鬼面をかぶつた神がいた。寺の本堂はわずか7日で再興され、この指揮をとっていたのがマダラ神であつたという話が広まつた。この伝説が元になりこの祭りが始まつたと伝えられます。

「三正」には「摩多羅神（またらじん）は、天台宗、特に玄旨帰命壇における本尊で、阿弥陀経および念仏の守護神ともされる。常行三昧堂（常行堂）の「後戸の神」として知られる……」

天台宗の円仁が中国（唐）で五台山の引声念仏を相伝し、帰国する際に船中で虚空から摩多羅神の声が聞こえて感得、比叡山に常行堂を建立して勧請し、常行三昧を始修して阿弥陀信仰を始めた」と書かれている。

後戸の神というのは本尊の裏でこっそりとそれを支えているような神様で、これは隠されて見えないようになっていくという。

日光輪王寺常行堂摩多羅神像の絵には不思議な笑みを浮かべた摩多羅神と2人の童子が踊る様子の絵がある。また、この2童子は丁禮多（ちようれいた）・爾子多（にした）の言う名の

二童子といわれ、貪・瞋・癡の三毒煩惱の象徴とされる。そしてつとも注目すべきは、この摩多羅神は、田楽や猿(申)楽になり能の発祥の起源になったといわれていることにある。世阿弥は「風姿花伝」の中で能の歴史について書いており、秦河勝が建てたお寺まつたとしている。この秦河勝が建てたお寺がもう一つの(摩多羅神の)鬼まつりを行っている京都太秦の広隆寺なのです。

水雲問答 (9) (木村 進)

【はじめに】

松浦静山 甲子夜話 巻39【1】より

これは江戸時代の(長崎)平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話(かつしやわ)」の中に挿入されている2人(水・雲)の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

水雲問答(46) 不学無術

雲..

兎角世人不学無術ゆゑに、尽(ことごと)く、古人の覆轍(ふくてつ)を踏(ふみ)て存申し不候。成敗する処は殊なれども、本は同じ処より、敗申し候も成り申し候も起り申し候。夫故に深謀遠慮と申すことは夢にも知らぬことに候。一時を只(ただ)うかうかと太平とのみ楽(たのし)み候こと、長大息すべきことに候。

(訳)

とかく世の中の人は学ばず、術(解決の手立て)がないから、みんな、古人が失敗したことを繰り返して失敗することに気がつかないのです。成功や失敗するところは、昔とは違っています。本質は同じ処から起こっています。そのため、深謀遠慮後の事まで深く考えを巡らせれることなどというところは夢にも知らず、今という時をうかうかと太平に楽しむだけという事は、たいへんなげかわしいことでございます。

水..

寇菜(こうらい)公にさへ霍光(かくこう)の伝を読せ申す候。今人のこと、歯牙(しが)に挂(かく)るに足らず候。

(訳)

中国宋の名相である寇菜(こうらい)公(寇準..こうじゅん)にさえ、漢の霍光(かくこう)武帝の次の天子)の伝を読ませたというではないか。今どきの人が不学無術かどうか、歯牙にもかける必要はありません。

(コメント)

寇菜(こうらい)公(寇準)も不学無術の人ともいわれていた。しかし、初代宋の名相の張詠(ちやうえい)は、ある時、寇準に向かつて「霍光の伝は読んだか」と尋ねた。「まだ読んでいない」と言うともその後言わなかった。後に寇準が霍光の伝を調べるとそこに「不学無術」という言葉が目にとまったという。寇準は悟って、その後勉強して立派になったという。

まあ、今の人が学問をしないなどと嘆く必要はなく、自分を先ず磨いて手本示して人々を導けばよいといっているように思います。

林述斎(水)も幕府の学問頭として、その後の幕末の偉人などを育てる先駆となっていました。

水雲問答(47) 我が分を知って、職を越えず

雲..

人は我が分を知て、職を越申さぬこと第一に候。君子とかくに忠過ぎ、身を忘て職を出、成らぬことを無理に為し得んとして、害を受けること多し。是私になるが故に候。故に孔聖は三子の後に従て、敢て職を越たまはず候。聖人たるゆゑと感心致候。

(訳)

人は自分の身分等の分を知って、その職を越えないようにするのが第一だと思います。君子はとかく忠心過ぎて、出来ない事でも無理に行おうととして失敗する事が多いと思います。これは「私(心)」になるためでしょう。ゆゑに、孔子は夏(か)、殷(いん)、周の三つの王朝のことを勉強して、敢えて与えられている職を越えずにいました。聖人であった所以であると感心いたします。

(コメント)

孔子は聖人として最も有名ですが、孔子が出てきたときには、乱れた春秋時代の終わり頃で、周王朝の力が衰えてきた時です。しかし、この周王朝もその前の三つの王朝(夏(か)、殷(いん))の長所と短所を学び、取捨選択して、周の高い文

化が花開いたのです。このため、孔子は、夏と殷の良いところや悪いところを研究した周のことを学び取って進もうと思つたのです。孔子当時はすでに周の力も衰えていましたが、周が王朝を築いたときには、その前の13つの王朝のよいところや悪いところを素直に認める姿勢があつたのです。ですから孔子もそのことを学んでいくことで今の儒教の精神を培つたのだと思われまふ。

孔子は聖人ですが職業地位としてはけして高くは無かつたのです。逆に役職に付かなかつたからこそ芸が身についたともいつています。

水・

水雲問答 (48)

身入れて事を為す

雲・

天下国家を治る人、とかくに身を入れぬ故に、善きことも出来申さず。夫(それ)と申(もうす)も仕損じ候とき逃れんとすること先になり候故に候。愚意には、ことをなす時深入りすべきことと存候。もと此ことの成ると成らざるとは、識を以て断じ申候。見切申せずと深入りいたし、四方八面みな推(おし)はなし、独立致すべく候はば、大事はなし得るに難かるまじく。兵法の死地に居るの論、治道にも用ふべき哉(かな)に存候。好事の妨げは半途にて止(とどま)るに有り候。

(訳)

天下国家を治める人は一般に問題の中(渦中)に身を投じないために、善いこともできません。それと申しますのも失敗したら責任が降りかかってきますので、それから逃れようとすることをまず考へてしまつたためです。愚意(私のつたない意見)としては、事を行うのに深く身を入れるべきと考へます。その事が成就できるか出来ないかは、自分の識(見識)で判断すべきであります。きちつと自分の考へでその事の中で深く入つて、四方八面(周りに)に気を遣うことをやめ、独立すれば(毅然として行えば)大事をなすとげること難しくはないでしょう。兵法には「死地に居る(入る)」という言葉があります。これは国を治める、治道にも用いたらよいと思ひます。好い事ができない妨げは何事も中途半端に止まつてしまふことにあると思ひます。

水・

これは英雄偉男子の為る所にして、庸(よう)常人の為し得ざる所に候。何ごとも斯(か)くありては、成らぬことは無き理に候。古人の為(せ)しこと、今より見れば、為し難きことを能く為おほせたるやうに見ゆること多く候。今人は為し易きこと皆為し得ず、若し為す時は仕損じ候。成事多きも、皆身をはめて為(する)と、にげ足ながら為(す)るとの差より起ること、高見の如くに候。識を以て断ずるに至りては、天稟(びん)と学力の二の外之無く候。己れの稟賦(ひんぶ)を頼まずして学を勤るこそ、識見を篤くし、大事を為すの基なるべき。

(訳)

これは英雄偉丈夫のできることで、並みの人にはできないことです。何事もこのようにあれば、出来ないことは無いことです。昔の人が行つたことを、今から見れば、出来そうもないことをよく成し遂げたと思へることが多くあります。しかし、今の人はたやすいと思ふことも成し遂げられません。もし行つたとしても失敗してしまひます。成し遂げることができた事案も、皆身を入れて事を行うか、逃げ足で行うかの差で決まります(ことは、ご意見の通りです。しかし、識(見識)をもつて断ずるとなりますと、識には生まれつきもつてゐる能力と学問で得た能力の心つ以外にはありません。自分の生まれつき持つてゐる天分を頼ることをしないで、学問を熱心に行ふことこそ、見識を広げ、大事を行う基礎とすべきです。

(訳)

これは(こつこつ)した尖つた考へは無く平らかなる説です。いわゆる英豪(英雄、戦国武将など)にみられる見識ではなく、聖賢(学問をした賢い人)を指す言葉です。しかし、昨今の軟弱な者は、悪い心得で、引込み思案(ひっこみじあん)の者ばかりになつてしまふ弊害も出そうです。とにかくこの議論は、それにふさわしい人を待つて行ふのが肝要だとおもひます。そのような人がいない場合には孔子が言つてゐるように、天下中庸(正しく変わることをない偏りの無い道理)がありまふので、公といえる人がでてくるでしょう。

水雲問答(49) 権変を以てことをなし得ること

雲・

権変を以てことをなし得ること、又時に寄り棄つるべからず。大事ならば一生に一度、又は二度に過(すぐ)べからず。偏なる者にて人服せぬこと多し。多ほく一時のことになくて、跡に残ることのことに用(もちふ)べからずと存候。

(訳)

その場に応じて臨機応変に事に当ることは、時によっては棄てがたい事でしょう。大事をなす場合には、一生に一度または二度以上はしてはいけないと思います。何度も行えば偏(かたよ)つた者となってしまう、人は付いてこない場合が多くなります。この多くは、一時的なことではなく、痕跡が残るようなやり方で使うべきではないと思います。

水・

古に云ふ権は、ことの軽重をはかり、其の宜(よろしき)を得るを以て権衡の物を量るにすれば、権の当る所則(すなはち)経にことならず候。後世に云ふ権略、権変、権謀、権機の類は、非常の時施す可(べ)くして、平時に行ふ可からず。閣下云(いふ)所の権は、権詐(けんさ)の類なり。古の権は時を択(え)らばず、一二を限るべからず。其(それ)に当りては皆行ふべきことに候。

(訳)

昔使われていた「権」という言葉は、事の重

さ(軽重)をはかり、そしてその良い落としどころを得ることで、この権衡の物を量る(釣り合いをはかる)ようにすれば、権(権力)はいわゆる経(経営)とはなりません。後世に云う「権略(その場に応じた策略)」「権変(臨機応変な手段)」「権謀(はかりごと)」「権機(かりそめ)」などとして使う「権」のたぐいです。これらは非常時に使うもので、平時に使ってはいけません。

(コメント)

権が天秤ばかりの分銅の意味である事は、この水雲問答の最初の(2)「経国の術と権略」に述べられています。

「ふるさと風の文庫」

下記サイトにて販売しています。

(送料は無料です。)

ふるさと風販売 Shop

URL: <https://ishioka.buyshop.jp/>

会報「ふるさと風」、ブログ等に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター(国府3-1-16)でも常時展示・販売しています。また、自分で書いたものを本にして見たい方も相談に乗りますので気楽にお声をかけて下さい。



お問合せは：080-3381-0297 木村まで